

タイトルルッキズムの内面化と美容行為

—美の規範をめぐる経験と葛藤—

井上奈々香

要旨本文

本研究のテーマは、大学生におけるルッキズムの内面化が、美容行為や就職活動の経験のなかでどのような両面性をもって現れているのかを明らかにすることである。外見への意識は自信や安心感につながる一方で、不安や義務感も伴うという仮説を立てた。外見をめぐる問題を、個人の努力だけではなく社会的規範や評価構造と結びついた問題として捉え直す点に本研究の意義がある。

先行研究の整理を行ったうえで、大東文化大学生 75 名を対象に、外見認識、美容行為、就職活動意識、醜形恐怖症、美容整形への態度を問う調査を Google フォームで実施した。

外見を重要だとする回答は 7 割を超えた一方で、外見で人を判断することへの抵抗感も併存していた。多くの学生が周囲との比較や SNS などを背景に外見不安を経験しつつ、スキンケアや脱毛などは「身だしなみ」として日常化していた。美容行為は「楽しい」「自信がつく」という肯定的感情と、「面倒」「義務感」といった負担の両面を伴っていた。また就職活動においては、外見が清潔感や好感度と結びつき評価されると認識されており、リクルート整形にも理解と違和感が併在していた。

以上の結果から、ルッキズムの内面化は、外見を通じて自信や安心感を得られるという肯定的な面と、外見への不安や義務感、評価への配慮といった拘束的な面が同時に存在するものとして経験されていることが明らかになった。このことから、本研究で立てた仮説は概ね支持されたと言える。ただし本研究は大学生という限定的集団を対象としており、今後は他世代や異なる社会集団にも対象を広げて検討する必要がある。

フォントサイズ：タイトルのみ 18pt、その他 10.5～11pt

和文フォント：MS 明朝

欧文フォント：Times New Roman